

## 【海外からの風】

# イベリア半島で考えたこと

——スペイン・セビーリヤからポルトガル・リスボンへ出張報告——

上 川 通 夫

### 1 目的と概略

2013年7月6日から同7月13日まで、学外研究としてスペインとポルトガルに出張した。2011年から学内での共同研究「大航海時代の戦国愛知」を実施しており、2012年度と2013年度には学長特別教員研究費を受給している（代表上川）。研究会では、最新の研究状況を探りながら、日本と西欧に残る古文獻を探索し、翻訳などに着手しつつ、歴史像再構成に資する成果を将来に実現しようと、コツコツと風呂敷を拡げている。このたびの出張は、その一環である。研究会メンバーの川畑博昭氏との現地視察であり、あわせて現地研究者との研究交流を目的とした。

スペインでは、セビーリヤにあるインディアス総合文書館（Archivo General de Indias）を7月8日に訪問した。「日本からローマへキリスト教の陽光を求めて—支倉使節団（1613年～1620年）—」（原題は“De Japón a Roma buscando el sol de la cristiandad: la Embajada de Hasekura (1613-1620)”）が開催されていたからである。2013年と2014年は、日本スペイン交流400周年に当たっている。伊達政宗が派遣した支倉常長一行が、ローマに向かう途上、太平洋を東に横断して、メキシコのアカプルコを経由し、大西洋を航行してイベリア半島に上陸し、セビーリヤに滞在したことなどが、その由来である。スペインと日本では、いくつかの機関がこの節目に合わせた展示や研究会を開いている。マドリッド・コンプルテンセ大学夏季講座「日本スペイン交流400周年」（7/8～7/12）、日本のスペイン史学会大会「慶長遣欧使節400年—新出史料からみる時代と世界観—」（10/26）、仙台市博物館特別展示「伊達政宗の夢—慶長遣欧使節と南蛮文化—」（10/4～11/17）、外務省外交史料館特別展示「日本とスペイン

「外交史料に見る交流史」（7/22～11/29）など、ほかにもあろう。その一つが、故地セビーリャで催されていた。

川畑氏の周到な事前連絡が功を奏して、インディアス総合文書館で展示を担当された学芸員のピラル・ラサロ氏（Pilar Lázaro de la Escosura）から説明を受けることができた。日本皇太子のセビーリャ訪問は6月14日のことだったが、その予定に合わせて、2か月間で急遽企画した展示だという。日頃、よほどこのテーマに関心がないと、これほど充実した展示を短期間で準備することはむづかしいだろう、と思われる中身だった。スペイン語等の古文書、古地図、絵図、工芸品のほか、徳川家康と徳川秀忠それぞれの朱印状（実質的にはスペイン国王フェリペ3世宛）の原本などによって、ローマへの行程が復元されていた。展示内容の詳細については、研究会として別に報告する機会があろう。展示図録などは作られていなかったが、全展示品に関する詳細な目録（スペイン語）を、データで提供された。ここでは、同館が作成した展示目録中のタイトルのみ、川畑氏訳によって掲げさせていただきたい。

- 第1部門：未知の日本から天正使節へ
- 第2部門：豊臣秀吉の死までの西日関係
- 第3部門：ヌエバ・エスパーニャまでの道のり
- 第4部門：ロドリゴ・デ・ビベロとアロンソ・ムニョス修道士使節団
- 第5部門：セバステアーン・ビスカイノと慶長使節団の開始
- 第6部門：慶長使節団—アカプルコからセビーリャへ—
- 第7部門：慶長使節団—セビーリャでの支倉—



図1 スペイン・インディアス総合文書館の企画展示リーフレット(部分)

第8部門：セビーリャから王室へ

第9部門：ローマへの道

第10部門：使節団の不運な結末

インディアス総合文書館そのものが16世紀の建築物で、世界遺産に登録されている。この日のセビーリャは外気温49℃という信じがたい暑さだったが、展示室は快適に空調されていて、企画展示だけでなく、かつての文書保管の様子が、壁に据え付けられた棚や引き出しによって目の当たりにできた。学芸員ピラル氏には、研究会で2012年に作成した『大航海時代の戦国あいち』（愛知県陶磁資料館企画展示解説冊子）を寄贈して辞した。その後、ピラル氏をはじめ、同館館長よりも書信が届くなど、研究交流は継続している。

ポルトガルでは、リスボンの西郊にあるマカオ科学文化研究所（Centro Científico e Cultural de Macau）を訪問し、研究員のペドロ・コレイア（Pedro Correia）氏と意見交換した。リスボン大学で教鞭をとる同氏は、多言語を駆使する文献史学者で、ポルトガルにおける「大航海時代」研究の状況を熟知しているのはもとより、イエズス会やフラシスコ会などキリスト教諸会派間の動向に詳しく、バチカンの教会史料を調査するなど、確かな研究手法と見識を備えておられると感じた（川畑氏の堪能な通訳を介して）。今回は、研究成果を交換するとともに、同氏を本研究会の海外研究協力者になっていただき、今後の研究連携を進める考えで一致した。

なお、「大航海時代の戦国愛知研究会」は課題発見的に共同研究を進めており、来年度以降の新計画を練っている。

## 2 研究の持ち場から

私自身は、日本列島をフィールドに、10世紀から12世紀に時期を絞って、社会の構造変化を古代から中世への転換として捉えつつ、仏教史にその歴史的本質が表現される時代だと当たりをつけ、ほそぼそと勉強しているに過ぎない。16世紀を中心とする「大航海時代」については、学術論文と呼べるものを書いたことがない。ただ、日本中世史の終末と世界史の成立とが結びつくこの時代からは、中世成立史研究をもかき立てるものを感じる。「戸外では中世

はずでに終わり、西国には西欧の商業資本が訪れてきていたのである」、という石母田正『中世的世界の形成』（1944年執筆、1946年刊）の結びが印象深いのは、苦渋と葛藤の歴史にも確かな将来展望があることを、世界史に目を見開かせつつ確信させるからであろう。2013年の時点で、大航海時代の戦国愛知研究会に参加し、イベリア半島にまで出張しようという意思が生まれることについては、一応説明の辻褄が合う。しかしここでは、行った先の現地で考えたことを少しだけ記しておきたい。

スペインやポルトガルは、歴史的には近代世界の最先端であったが、地理的にはイベリア半島というユーラシア大陸の西端である。東アジアの極端というべき日本列島に住んで日本中世史を学ぶ者にとって、イベリア現地に立つとやはり感慨が湧いた。というのも、日本の古代史・中世史を考える際、過去の歴史事実を知ると同時に、かつての歴史認識を無意識的にも背負うので、「日本」の相対視や、外なる視点の堅持は、必ずしも簡単でないことを痛感しているからである。「帰化人」（おのずからもうくるひと、君主の徳をしたって自発的に従属してきた外国人）なる特殊用語の無頓着な使用や、「国宝」に指定された仏像の権威的で異国風の造形に庶民の信仰心を読みとってしまうことなど、自戒したいことは多い。

先学たちは、そのような陥穽から逃れる方法の一つとして、東アジア世界論、東アジアにおける日本史、という研究枠組みを提示され、事実の証明に努力された。すでに50年余の研究蓄積と議論がある。ここ20年余では、陸路・海路の人的・物的な移動と交流諸相が解明され、国家間の政治交渉ではない、生活者住民の個性的世界が明らかになる傾向にある。この研究潮流から、東アジアを超えて、東部ユーラシアという視野が提言されてもいる。ただ私の中世成立史研究について言えば、歴史的世界としての東アジアという枠組みはなお捨てがたく、遼、金、西夏、高麗、北宋、南宋、日本などの国家間外交が時代の主軸となる重要局面は、なお充分には解明されていないと考えている。一方で、世界宗教というべき仏教が目に見える形でこれら諸国に展開していたことと関係して、インドとの関係は、間接的にであっても無視できない問題をはらむと思う。

ずいぶん視野が広がった、と考えていいかどうか。イベリア半島、つまりユーラシア西部に立って考えると、頭の中を整理するのがむつかしかった。マカオ科学文化研究所は、テージョ川の河口に近い地区にあるが、その西にある少し古風な街ベレンは、航海船が発着する大西洋の出入口に築かれた港町である。川畑氏の案内でゆっくりと足を伸ばし、16世紀にヴァスコ・ダ・ガマの世界一周を記念して立てられたベレンの塔（世界遺産）に登った。水際に立つこの要塞の向こうには、まさにユーラシア西端を実感させる大洋の眺望が広がっていた。同時にそこで、私は方向感覚を失いかけた。西に広がる海はまさに大西洋。その先には南北アメリカ。さらに向こうの太平洋を西に越えると極東。西に行くと東がある。地理にうといが故の混乱だが、東アジア、東部ユーラシア、という学術用語に慣れていたことが攪乱を助長した。



図2 ポルトガル・ベレンの塔

支倉常長一行が太平洋と大西洋を横断したのは400年前なのだから、日頃の関心事たる800年前や1000年前の日本中世成立史とは無関係である、と割り切ってしまうえばそれまでである。けれどもそれは、そもそも世界史や人類史への関心と省察が欠けているせいかもしれない、という自問が湧いた。

400年前の日本については、日本史上の中世から近世への転換期と見なされているが、それを東アジアでの共時的運動に位置づける研究が説得力をもつようになり、しかもイベリア・インパクトの契機性を政治史・産業史・思想史などからあらためて問う研究もある。ただそこには、なお、アフリカや中南米への視点が充分ではないように感じられることがないではない。直接的ではなくとも、間接的ながらも重要な関連事実について、もっと追究されてもよいので

はないか。

イベリア半島の航海者たちと、アフリカや中南米の住民たちは、日本への「キリスト教伝来」や「鉄砲伝来」より半世紀以上前から、壮絶な歴史的遭遇を経験している。日本に連れてこられたアフリカ人や中南米人の奴隷、また日本から連れて行かれた者、といったことのほかに、これら諸地域間における思想史上の連関なども、見出すべき研究課題であろう。とりわけ、中南米におけるインディオ虐殺を告発した宣教師ラス・カサスの思想が意義をもつ例のように、人民主権原理の歴史的淵源が「大航海時代」にあって、そのことが潜在的・間接的であっても日本史に関係した可能性がある。このことは、川畑氏が研究会の場でも説かれている（川畑博昭「大航海時代イベリア文書における「人民主権」の原理的意味―「近代法」再考のための「主権」の「抗議性」についての覚書―」『愛知県立大学文字文化財研究所年報』6、2013年）。証明の困難さは今後克服しなければならないが、認識しておくべき問題であろう。

イベリア半島への出張中、そんな課題が明確に焦点を結んでいたのではない。ただ漠然としたことながら、日本中世成立史研究のことを思い返しながら、次のことは言えそうな気がした。

目に見えにくい思想、潜在する動向、間接的な影響関係、こういったことは考証学の範囲外かもしれないが、世界史ないし人類史の来し方行く末を考える場合には、むしろ最も重要な問題かもしれない。

ほんの少しだけ、勇み足を自覚した上で具体例をいうと、紀元前4世紀のインドでブッダらによって述べられた「サンガ」の平等的結束思想が、仏家に継承される歴史的経緯の一方で、12世紀日本列島で村づくりに立ち上がった庶民に着目されて「和合」の思想として自覚された、といったようなことがある。前近代の普遍的思想が近代の思想にどう橋渡しされたか、また今日から将来へとつながるのかどうか、問題はなお手に余る。ただ、叡智の思想史は、国境や民族などで寸断されるのではなく、世界史上の継承と人類史的な発展をたどるものだと期待したい。